休会通信⑤

幹 事 報 告　　R2.5.20（水）

幹事　櫻井

「それでは、2019～2020 年度 第 31 回 通算 1960 回 幹事報告を致します。」

一、「ロータリー米山記念奨学会」より、「ハイライト よねやま 5 月号」が　届いております。

一、「ロータリーの友」事務所より、「新型コロナウィルスに関する友事務所　対応の件」が届いております。

一、「例会変更」のお知らせが届いております。

以上

会長の時間

もう一つの関ヶ原

本日は歴史の話です。西暦 1600 年の 10 月 21 日、関ケ原の戦いが起こりました。それに関してはかなり有名ですので違う視点からの話をします。
黒田如水（官兵衛）です。姫路出身の武将なので現役時代の活躍はよくご存じだと思います。それだけの武将が大戦の時に何をしていたのでしょう。
官兵衛はこの当時表面上家督を息子の長政に譲り隠居生活を送っていました。そして関ヶ原の戦いで長政が活躍していた頃、官兵衛は黒田家の領地である豊前の中津城にいました。主力部隊は上杉討伐から転じての東軍参加のために従軍していますので、200 人程度の少数の部隊と共に留守番をしていました。しかし官兵衛はおとなしく領地や城を守っているつもりはなく、この機に秀吉に警戒されたほどの才能を発揮します。
官兵衛は生涯の大半を人に仕え、その対象の勢力の維持や拡大に貢献してきましたが、この 54 才を迎えた時期になってはじめて、自分の意志と判断だけで行動できる自由を得ました。この時に官兵衛が本気で天下を狙っていたかはわかりませんが、戦乱がもつれにもつれればあるいは、とは考えていたのではないでしょうか
官兵衛はたった 200 人ほどの元手ではじめ、わずか 2 ヶ月ほどで九州の大半を占領してしまいました。まるで魔法のような現象ですが、そのたねは官兵衛が蓄えてきた多額の資金にありました。官兵衛はまず資金を投じ、農民や牢人（主君を失った武士）などで構成されたにわか仕立ての軍隊を作ります。。
全九州に募集をかけると 2 ヶ月ほどで 9000 人の部隊ができあがり、この戦力をもってがら空きとなっている北九州の諸城に攻めかかります。黒田家と同じく、大半の大名の主力部隊は関ヶ原の戦いに参加すべく出払っていました。従って寄せ集めのにわか軍隊でも、官兵衛の優れた指揮とあいまって、九州で猛威をふるいます。官兵衛はまず豊前・豊後の大半をわずか 10 日ほどで占拠してしまうというすさまじい手腕を見せました。
そうした戦勝によって軍勢は 1 万 3000 にまで膨れ上がり、さらに勢力の拡大を図ったところで、関が原の戦いがわずか 1 日で終結したという情報が寄せられます。
おそらくこの瞬間に、あきらめのよい官兵衛は「もしかしたら天下を取れるかも」という夢を捨て去ったことでしょう。たった 1 日で終わった戦いに最も活躍したのが息子の長政であったことは少し皮肉でもあります。
主力決戦が終わったことを知った官兵衛は家康に領地切り取り次第の約束を取り付け、九州の残敵掃討にその軍を用いました。
ここまで来たらやりかけた仕事は最後までしあげてしまおう、と思っていたのかもしれません。
この後は鍋島や加藤といった九州における東軍側の大名と合流し、西軍についた大名の城

を次々と攻め落とし、九州の大半を占領することに成功します。
官兵衛の名声は九州でも広く知れ渡っていたようで、もしも攻め手に黒田官兵衛がいたら、抵抗せずに降伏せよと留守番部隊に言い残してあった大名家も複数あったようです。
九州占領の事業も後はいよいよ薩摩・大隅（鹿児島県）の島津を残すのみ、となったところで家康から島津との講和がなった旨が伝えられ、官兵衛は軍を解散します。
官兵衛がその才腕を十全に、自由に発揮できたのはこの年の 9 月から 11 月まで、おおよそ 2 ヶ月ほどの期間でした。